
ある日僕は女の子を拾った

まさひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日僕は女の子を拾った

【Zコード】

Z3784U

【作者名】

まやひろ

【あらすじ】

どこにでもいる普通の高校生 藤原悠貴

そんな普通の高校生がある日自分の家の前で倒れていた少女みやのりか
さき 沙希を救う

「ねえハル、私たちが出会ったのって『運命』だったのかな?」「『運命』じゃなつたら何なんだ沙希?」

これまでもこもる普通の高校生がどうでもいなこ少女を救つ
お話

序章 家の前に倒れていた少女

僕の名前は藤原悠貴

この春やつとの事で志望していた高校に入学する事ができた今は春と夏の間の梅雨

そろそろ高校にも慣れてきてクラスにも馴染んでくる季節そんな季節に君はもし、まったく見ず知らずの少女が暑い夏に自分の家の前で倒れていたらどうするだろか？

これはそんな普通の高校生がとある少女を助けるようなお話です

「だあ～暑い！なんでこの季節はじめじめして暑いんだよー。」
「お前の方が熱いわ。しゃべるなバカ」

学校が終わった帰り道

その帰路と一緒に歩いているのは高校最初の友達（友達って呼んでいいのか分からぬ）、高木翔吾 同じクラスで隣の席だったため向こうから話しかけてきたのがきっかけだ

どっちも部活には入るはずの部のため一緒に帰っていたいつもは帰り道にある喫茶店でしょべつていうかゲームセンで遊んでいた 翔吾が何やらケータイをいじっていた 返信したのかケータイを閉じてポケットに入れこっちを向いた ちゅうど通りの信号が青に変わった

「悪い悠貴、急に用事ができた。今日は帰るわ
「そうか、じゃあ俺はマクド行って帰るかな」

「おひ、また月曜な

マクドと翔吾の家は交差点を曲がるためここで分かれた
俺はまっすぐマクドの方に歩いていった
だが俺はこのときは知らなかつた
進んだ道がこの後の運命を変えるものとは……

マクドでショイク（今日の気分はストロベリー）を頼んだ
今は住宅街をうろうろ散歩中
俺はシェイクを飲みながら街をぶらぶらするのが好きだった
外で飲む方が開放感があつて好きだからだ
ズズー

「もうなくなつたのか」

空になつた容器を盛つていたら運良く近くにゴミ箱があつた
それに向かつて放り投げた
弧を描いてゴミ箱に入つた

「何にも起きなきや良いけど……」

実は手で扱う球技がものすごく苦手だった
それが入るとなつたら嫌な予感以外しなかつた
案の定、曲がり角で走ってきた男の人とぶつかつた
向こうの方が体格が良くてこっちが尻餅をついた

「こつてー」

「ちっ、氣をつけよー！」

そのまま走り去ってしまった

「そつちがぶつかったんじゃねえか！」

もう行つてしまつたため聞こえてはいないが言わなきやすつきりしなかつた

夏だと言つのに真つ黒なスースを着たいかにも堅^{かたぎ}気ではなさそつな男だった

まだ少しイライラしながらも道路に座つて立上^{あが}りそのまま道を曲がつた

「礼儀知らずな大人が多くなつたな」

道なりに進んでいくと黒塗りのベンツが駐車してあった窓ガラスもスマートで隠されていた
だが、ドアは開いたままで誰も乗つていなかつた
念のためドアは閉めてその場を後にした
面倒^こごとに巻き込まれたくないの

「今日一日、本当に面倒^こごと多かつたな」

家がよつやく見えてきたこの日の事を思い出した
家の前まで行くとそこに見慣れない少女が大きなバックと一緒に倒れていた
少女といつても自分と同じくらいの年齢だろう

少し考えて声をかけた

「おーい、大丈夫か？」

返事がない、ただの屍のようだ
しゃなくて、やばいんじやねこの状況！
今度は体を揺らしてみた

「うーん……」

よかつた、意識はあつた
けどこのまま放つておいたらどうなるかは分からぬ
それに、自分の家の前だし

「仕方ない。連れて帰るか」

苦渋（？）の決断を下しその少女を家に連れて帰る事にした
少女をおんぶして荷物を持った
以外にも女の子は軽いと初めて実感した

第1話 女の子のお願い

家の前で倒れていた女の子
俺の親切心で今は俺のベッドで寝かしている
ちなみに決して邪な思いはないぞ！本当にぞー！

「冗談はともかく
この女の子がどういう経緯で俺の家の前で倒れていたのかは聞いて
おきたい

「つてもうこんな時間かよ」

2時間くらいあの女の子の事を考えていたらく7時だった
日が傾いて少し暗くなっていた
晩御飯の支度をするために台所に行つた
俺の家は父親が1年に数回、母親が1ヶ月に1回の割合で帰つてくれる
そのため実質1人暮らししみたいなものだ

「こつも通りで良いよな

今日は上で寝ている女の子の分も作る
材料と気分的に親子丢にした
女の子は食べてくれるかどうかわからないうち

ちょうど晩御飯の仕度ができた時
トントントントン
と、誰かが階段を下りる音がした
まあこの家には2人しかいないけど

リビングのドアが開いた

「あ、あのー」

彼女の第一声は遠慮がちだつた
けどその声はとてもかわいらしかつた

「何?」

「えーと……」

ちょっと言い方がきつかつたかな
起きたら見ず知らずの男の家にいて不安だらな
それよりこつちは腹減つてゐるし

「とりあえず晩飯作つてるけど食べるか?
「じゃ、じゃあいただきます……」

もぐもぐ

うーん……ちょっと出汁が薄かつたかな
久しぶりにしては上出来だろ
それにもしても彼女の食べ方は上品だつた
どこかのお嬢様かよ!って言われてもうなづけるほど

「そのーお名前を伺つても良いですか?」

そろそろ俺もこの沈黙がきつかつた
確かに未だに名前すら聞いてなかつた
それより話題を振つてくれたのがありがたかつた

「藤原 悠貴 ふじわら ゆうき 16歳。普通の高1だ」

「藤原悠貴さんですね。『ハル』って呼んでも良いかな?」

俺の名前からの上田遣い

危つく右手からはしが落ちるとこだった
じゃなくて

「俺の呼び方くらいい好きに呼べば良い。それであなたの名前は」

「沙希 さき」

「上の名前は……つて言いたくないから下の名前だけしか言わない
んだろ」

彼女……沙希自身が言いたくない事情があるのはわかった
話には出さなかつたが沙希の手首にはテープで巻かれたような跡が
残っていた
だがそれは今は考えないで置く

「沙希自身いれからどうするんだ?」

「それは……」

沙希は少しの間考えていた

俺の方は食後の一服のお茶を飲んだ
やつぱ冷たい麦茶だな

「私をこの家に住まわせてくれませんか?」

「――――――
ふ――――――

きれいに麦茶が宙を舞つた

この時はじめて口から吹き出す人の心情がわかつた

第2話 女の子の一言

「私を『』の家に住まわせてくれませんか？」

その一言は『』の後の僕の人生を大きく変えた

彼女　沙希はどういう経緯いきゆで俺の家の前で倒れていたのかを教えてくれた

沙希はある事で父親とけんかをして家出をした

家出をしたその日に誘拐をされたらしい

どれも信じがたかったが彼女が嘘うそを言えるようには見えなかつた

「まあ大体事情はわかりました。えっと……沙希で良いか？」

「あ、お好きなように」

「じゃあ、沙希。俺は別に良いんだけど……」

彼女は何が駄目なのかわかつていなさそうで首をかしげいた
まあ何と言つかその姿見てたら可愛いな　じゃなくて！

「ほり、道徳上俺らは男女同士だ。よく言つだろ』『男女七三にして
同席せず』つて『

「それを言つなら』『男女七歳にして同席せず』じゃないんですか？』

ちょっと間違えました

恥ずかし、まさかの彼女の指摘

ちょっと傷心中

気を取り直して

「沙希は平気なのか、見ず知らずの男の家に住むのが」「少しは不安です、けどハルがもし悪い事をする人だつたら寝ていた私を襲つてたんじやないかな」

その言葉を聞いてあきれた

この子は人を少しも疑わないのかと

もし俺が彼女を住まわせなかつたら本当の悪い人がこの子のに言い寄つて体をあんな事やこんな事をしてしまうのではないかそんな事を考えが現実になるのを回避しなくてはならないそう決断するのには時間はからなかつた

「沙希！…！」

「あ、ひやい！」

「悪い、いきなりでかい声出して」

「いえ、大丈夫です。あ、お茶どうぞ」

「どうも」

空になつていたコップに麦茶を入れてもらつた
いきなり驚かされたのに他人に気が回るつてこの子どれだけ気遣い上手なのよ
て言うかこいつて俺に家だよな
お茶を飲んで一息ついた

「じゃあ本題に入る。沙希、ここに住んでいいぞ」

「本当ですか！」

イスから立ち上がり俺の近くまでやつてきた
いきなり俺の顔まで顔を近づけてきて心臓がバクバク鳴つてきた
初めて沙希の顔を良く見るとそれはとても整つていた

きれいに通つた鼻筋にくりくりとした大きな目
その表情は言葉にできないほどうれしそうな表情だった

「えっと、そんなにうれしいの？」

「当り前じゃないですか！私を助けてくれた人がとってもかっこ…
…」ほんつゝ、とっても親切な人の家に住まわせてくれるなんてうれしく

ないわけがないじゃないですか」

彼女の迫力に少し気圧されたが本人が喜んでいるのならこっちにしつてはありがたい

それに長年の一人暮らしで寂しさもあったので俺の方もうれしかつたりもする
そんなわけで

「これからよろしくな沙希

「私こそよろしくお願ひしますハル」

こうして俺達の共同生活が始まった

第3話 女の子の寝る場所

まず最初の課題

女の子もとい沙希をどこで寝さすかだ
うちの構図は4LDKの一戸建てである
だが生憎と家には空き部屋がない
俺、父、母、弟で部屋が埋まっている
来客用の部屋でも作つとけよーとは口が裂けても言えない（母）
そんな事で今俺は必死に考えています

沙希は今はシャワー中です

決して覗きには行きません！

それより、今の俺が考えたのは

1 俺のベッドを貰す（俺はソーリングのソファードで寝る）

2 俺の部屋で布団を敷いて俺が寝る（沙希はベッドを貰す）

3 一緒にベッド……ゴホッゴホッ

3つはボツとして

沙希には悪いがこの2つの中から選んでおひらがい

「ハルー、何一人で喋ってるんですか？」

「わっ、びっくりしたー！」

いきなり後ろから声がかかつて驚いた

知らない間に沙希が風呂から上がっていたらしく
それより今まで声に出してたなんて……

「あれ、お前の寝る場所なんだけど……」の中から好きな選んでくれ

そう言って俺は3つのフックを出した

何か言いたい事はあるかもしれないが気にするな
作者がやりたいだけだから

ともかく彼女に選んでもらわなきゃいけない

「この3つから選ぶんですか?」「

「あ、この中から選んでくれ」「

沙希は3つの中から……3つ?・

「じゃ、じゃあこれこします!」

そう言って選んだのは、まさかの3つ目ー

「ちょっと待てーーー向かいの中でしかもそれーーー」

「えー?ダメなんですか?」

あまりにも驚きよつ

断るとは思っていなかつたのか

「だからその他で選んでくれ」

「これがいいです!」

「ダメ」

「いやー！」

「拒否」

「けち」

・

・

・

何気に不毛な争い

結局2つ目で収まった

その後沙希にこんな事を言われた

「ハルってへたれなんだね」

その日、俺は寝るまで目が光っていたのは誰も知らない

第4話 女の子の朝ご飯

朝、目が覚めた

今日は土曜日なので学校はないが起きた
実は早起きだつたりする

布団から起きてベッドを見ると沙希の姿がなかつた

「あれ、もう起きてんのか」

その時、部屋のドアが開けられた

「おはようハル。もう朝ご飯できますよ」

「お、おう。わかつた」

そこに立っていたのは沙希だった（逆に違つたら怖い）

今日の沙希の髪型は後ろでポニーにしていて、俺の使つていたエプロンに良く似合つていた

まさに動ける美人！

それにしても、朝からこんな美人の顔が拝めるなんて

と少しだらしない顔になつていたが頭を切り替えて起きた

「ご飯冷めちゃいますから早く降りてきてくださいね」

そう言つて階段を下りていった

俺はすばやく着替えてご飯を食べに降りた

ちなみに俺は他人の手料理を吃るのは久しぶりだった

テーブルの上に乗っていたのは「ぐく一般的な朝ご飯だつた
白ご飯、みそ汁、しゃけの切り身、卵焼き
いたつて普通の和食なご飯だ

「「いただきます」」

俺はもくもくとご飯を食べた
簡潔に言おう

沙希の作ったご飯はとてもうまかった

「お口に含いましたか？」

小首をかしげて少し下からの目線がグッジョブ！！
今日の服装はピンクのチュニックにショートパンツと動きやすい服
装だった

これまたグッジョブ！！

じゃなくて

「いや、うまかったぞ。て言うか俺よりうまいし」

「本當ですか！？実は私、今日はじめて一人で作つたんです」

「へー、それにしてはうまかった」

これはお世辞でもなんでもなく率直な感想
何年も一人暮らしをしている俺よりも料理が上手い
けどこの事実にちょっと嫉妬してしまう

「お母さんの手伝いでもしていたのか？」

「はー。ときどき……」

「ふーん、そうか

ちょっと納得

けど、なんかくやしい

そんな小さい事で悩んでいた

その事に腹が立つたのか神様は俺に試練を『えてくれた

ピーンポーン

確かにいつの間に『テンプレー』って言わなかつたっけ？

第6話 女の子の説明

ピーンポーン

その音は家の人に呼び出している事はわかる
だが俺には、どうしても地獄が待つていうようにしか聞こえない

ピーンポーン

もう一度鳴った

「ハル、お客様さんだよ？」

「あ、ああ」

内心はこんな状況では出たくなかつた

何せ今は沙希が家に居ていいからだ

仕方なく重い腰を上げてリビングのドアを開けた

「おっ邪魔しまーーす」

何の前触れもなく玄関のドアを開けられた

こんな非常識な事をするのはあいつしか居ない

「邪魔するなら帰れ……高木」

予想通り

もし高木だつたら勝手に家に入る

そう思つてリビングの入り口を自分の陰で隠していて正解だつた
危うくリビングに居る沙希が見つかるところだつてしまつた！沙

希の靴が出てる！！

1人暮らしの男の家に女物の靴があると言つのはやばい事が起きた
もちろん俺に

俺は高木に早く出て行つてもらうために、
しかも靴がばれないようにいつもどおり追い返そうとし

「うん、どうした顔色悪い…………うん？」

俺の人生オワタヽ(^〇^)ノ

「もしかしてお前……」

だ

この近所さんに言へか?学校で言ふか?警察呼ぶか?どの未知俺の人生はおわ.....

「女装趣味か？」

「断じて違う！－どう見たって足のサイズ合わねえだろ！」

こいつ、殴り倒してやるうか
今まで言われた中で最低の侮辱だ

「ハア―――。 もうこじよ、 中入れ。 説明ぐりこしてやる」

半ば諦めて高木を家に入れた
て言つた勝手に玄関まで入つてきてたけど

リビングまで高木を通した時田を見張っていた

まあ、1人暮らしの男の家に見知らぬ美少女がソファーに座つたら誰だつて驚く

なんたつてまだ俺だつて信じられないんだし

「こ、こんなには……」

「あ、どうも……」

沙希は俺の友達であるうつと思つて高木に挨拶をしてくれた
それにしても、どつかのお嬢様みたいだな
一つ一つの動作が

そんな事に関心をしながら一応客の高木のためにお茶を出した
暑い夏にぴったりの麦茶を

「高木、じつちで話そうぜ。悪いが沙希も」

「お、おう」

「はい」

いつの間にかテーブルの上を沙希がかたずけていてくれた

それにしてもなんて気の効いた子なんでしょう

〔冗談はともかく今からまじめな話をするために真剣な表情に変えた
高木もその場の空気が変わったのを察知したのか（てかさつきから
あまり喋つてはいなかつたけど）ずっと口を閉じていた
そして俺は沙希の事について説明した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3784u/>

ある日僕は女の子を拾った

2011年10月9日01時37分発行